



Title	テクノクラートの誕生とその途上諸国における役割 ： 問題関係資料四篇 ： 経済諸学の領域に量から質へ の転換をめざして
Author(s)	山崎, 俊夫
Citation	大阪外国語大学学報. 1983, 61, p. 105-120
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80943
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

テクノクラートの誕生とその 途上諸国における役割

——問題関係資料四篇：経済諸学の領域に
量から質への転換をめざして——

山 崎 俊 夫

Nacimiento de Tecnos y Su función dentro de países desarrollantes

——Cuatro materiales en relación de problema: destinando al cambio radical en
ámbito de ciencias económicas a partir de la cantidad a la cualidad——

Toshio YAMASAKI

Para plantear el problema, pongamos al fundamento siguientes tres cotizaciones del caso argentino: sobre el derecho de aprender y enseñar, Rafael Bielsa decía—(1) “En lo que respecta a la instrucción superior o universitaria la Constitución de 1853 refiérese a ella en una disposición sobre las atribuciones del Congreso, al disponer (art. 67, inc. 16) que para proveer lo conducente a la prosperidad del país, al adelanto y bienestar de todas las provincias y al progreso de la ilustración este dicta planes de instrucción general y universitaria. En la reforma de 1949 se substituyó ‘ilustración’ por ‘ciencia’, y ‘planes’ por ‘organizando’. Es una reforma de detalle e injustificada, porque la ciencia no es cuestión de preceptos constitucionales, por otra parte, era más lógica la cláusula anterior, pues la ilustración es un concepto comprensivo.” (Véase, Rafael Bielsa, “Derecho Constitucional”, Roque Depalma Editor, Buenos Aires-1959. p. 385.); y también decía—(2) “La instrucción no se dirige entonces al conocimiento de la verdad, sino de una especie de verdad oficial, degomática y arbitraria. Solamente la técnica puede subsistir en esos Estados, porque la técnica no es más que un medio, y no un fin de alcanzar un ideal, y ese medio sirve para lo bueno y para lo malo. Cuando se habla de la superioridad de la técnica o de la eficiencia, para mostrar la posibilidad de lograr progreso material e inclusive científico (con las limitaciones arbitrarias que a la inteligencia se impone), en realidad se combate la libertad, la superación siempre creciente e indefinida del progreso.

De ahí resulta que el hombre instruido en ese sistema es sólo una pieza utilísima, quizás, en la máquina social, pero adherida a esta como lo estaba el hombre servil medieval a la gleba. En el fondo es un ruego usufructo del hombre, en favor no ya de una facción o banda erigida en autoridad...” (Véase *ibid.*, Nota 144 a pie de p. 378.): y otra parte quedaba encontrada entonces en Argentina, siguiente disposición del art. 25: decía—(3) “Se prescribe que el Gobierno federal ‘no podrá restringir, limitar ni gravar con impuesto alguno la entrada en el territorio argentino de los extranjeros que traigan por objeto labrar la tierra, mejorar las industrias, e introducir y enseñar las ciencias y las artes’. No se trata de una inmunidad fiscal respecto del extranjero que se dedique a la enseñanza, sino de la exención de toda contribución que se quiera imponer con motivo de su entrada en el país, precepto que si bien es fiscal, tiene una significación más bien moral. Es una prohibición impuesta al gobierno en materia impositiva.” (Véase, *ibid.*, p. 381).

Dichos tres casos de Argentina, serán, de fundamento, muy significativos al relacionar con nuestros estudios. Y, esta vez, para solucionar nuestro problema, mostraremos 4 lecturas de este material; la primera es mi ponencia al Congreso XXV nacional de hispanófilos de 1979, y otras demás son mis traducciones:

1. Socios industriales de la Compañía colectiva—Único sistema del Código de Comercio español—
2. Frederick Winslow Taylor, “Principios de la Administración Científica”—La parte de la ‘Introducción’—
3. Sacado de “El Salario y El Empleo en el Desarrollo Económico-Social de España”—Salarios Mínimos—
4. Vianna Moog, “Bandeirantes e Pioneiros” (Paralelo entre dos Culturas)—Ford-landia en Brasil—

I 合名会社における産業社員

——イスパニア国商法典のユニークな性格制度的側面——

(第25回日本イスパニヤ学会沖縄大会—主催校琉球大学—昭和54年12月8日土於那覇市都ホテル報告要旨)

この報告では初めに序論としての8点の項目を列挙して用意した後に、標題の本論に移る。

1. 企業経済学 (Ciencia Económica de Empresa) の立場から分析して、合名会社より株式会社へと一貫する企業経済学の計測論理の展開を試みるという基本的態度を方法論の基礎に置く。
2. イスパニアの企業体制には経営社会化理念の系譜として、海のソキエタス (Societas Maris) の普及があり、企業の社会経済的、かつ、歴史的立脚基盤となっている。(ビセンス・ベス博士の『経済史』にこの指摘が見られる。)

3. 元来イスパニアの企業体制では、経営者の機能の機動性について尊重が顕著で、その故に、戦後になってからであるが、慣行的に整理された株式会社法の改正がなされている。株式会社法改正の前文に特に次の3点が拾われる。

- (i) 未発行自己株の手許留保株制度と資本金誇大表示の旧慣行を対比して得失を考えたこと。
- (ii) 上記(i)に替える制度として授權資本制の扶植導入を企かったこと。
- (iii) 会計監査株主の選出による監査機関への代替がなされていること。

4. 一方、資本との関連において、労働の企業参加について、最近における日本経営学会で西独の労資協議制・共同管理決定法、及び特に第一次大戦直後からの従業員持株制度の発達を発想の根幹とする故市原季一教授が提唱せられた所有・経営管理参加説があって、これとイスパニアの場合との対比は興味あり、かつ、重要であること。（本論における国際比較の立場からの必要上改めてなお詳しく後述する。）

5. 合名会社法産業社員の利潤参加と海商法での船長手数料 (Capa) との対比がイスパニア国商法の中で可能なこと。（前者は企業利潤から支払われ、後者は顧客が直接出来高に比例して支払う。）

6. 産業社員の報酬に就ての簿記的处理と資本充実原則の間に突込んだ考察が必要なこと。（本論ではこの点を最も中心的な骨子にして論述する。）

7. 途上国としてのイスパニアに *infra* 部門投資の重要性和ベルピニャー教授のいわゆる *psicológico* な国民経済下部構造要素の改変充実拡張要求の必然性が存在すること。

8. むすび：以上をまとめて労働と資本の両側面から本題を考察してみなければならないこと。カルロス・イグレシアス・セルガスにも法制史的なこの労資両側面からの資料を提供した著作があるが、本題の産業社員は、フェルテス博士の指摘せられるイスパニアにおける複雑な調整機関の存在という産業労働社会の基盤から夙に現われて歴史的慣行的な要請の必然性として19世紀イスパニア国商法に現われた制度であると言えるであろう。イスパニアでは労働への報酬はもとよりであるが、資本に対してもその貢献に正当な報酬を与えることが社会的に公正な立場として体制的に保障されている。これは国民的な市民社会法理論の原則でもあるだろう。

産業社員の報酬は労働の利潤参加に、等価交換原則に近着けた効率格差配分としての一の理論的問題提起ともなり得るであろう。先に触れた西独の場合においても、市原教授の問題提起では、持株会社へと企業から拠出された基金の額による当該企業従業員への重点加重的格差配分が一案として出されている。イスパニアの論理からするならば、むしろこれが妥当として支持せられることになると思われる。

以上の序論における諸点の検討の後に、改めて本題の産業社員について、その制度の現代的な意義を考えるならば、商法の体系の中に特設せられた産業社員であり、制度的に経営の機動性を向上させたものであることが理解せられる。然しながら、資本充実原則から見れば、産業社員は出資社員ではなく、債権者保護の趣旨にはそぐわない。そもそも、合名会社経理の特徴はい

いわゆる Advanced Money (乃至 Account) の建て前で構成せられ、経営者に営業経費の前渡がなされる。この意味で、一般に人的会社であり、従ってソキエタスの典型であると注目されている合名会社に、イスパニアでは実は経営信託によるコマンド様式が会社社理制度の根幹となっていることを知り得る。更には、集合連帯性の結社内部に、経営管理担当社員と単なる出資社員との社内的分業区分があり、社員相互間で経営信託制度の導入による経営の機動化が企められている。以上のことから、イスパニアの合名会社はきわめてコマンド的な慣行の制度化を成し遂げていると理解せられる。その意味で、合名会社社理において、機動性の尊重をめぐる、資本充実原則と利潤配分原理との間の計測基本原理上の二律背反を生ずることになる。商法第140条と第141条との性格の差がその表明になっている。産業社員は利潤参加のみで、損失及び債務の配分には原則として加わらない。しかも利潤参加は最低出資者の額と同等額で算出されるのである。

Antonio Goxéns Duch 氏は資本金の勘定に、産業社員の項目を用意しておくことが妥当であると提唱しておられる。資本金勘定の記載が、利潤配分の基準になるからである。従って、産業社員の項目は、資本充実原則の保障にはならないが、利潤配分の比例格差按分の基準として必要不可欠な記載となる。(但し、同氏が合名会社の社員の責任を *ilimitada* と考えられることは賛成できない。“*Gestores y Comanditarios*”, 株式会社芸林書房刊の西文拙著テキストについてその理由を御参照願えるなら幸甚である。イスパニア国商法では、戦後の株式会社法改正と有限会社法の成立までは社員の責任に有限と無限の区別の語は現われていない筈である。)

西独の持株会社には、もちろんそれが株式会社であることによるものであるが、傘下企業からの利潤拠出があって、拠金をまとめた資本金を株式に分割するのであるから、既に資本充実は事前に完遂されている。

利潤は株主の取り分であるという *comanda* 系譜の考え方から出発して、Ibarreta 教授は利潤における差別原則 (*Discriminación en beneficios*) の問題を提起しておられ、社内留保と社外持出との関係から、株主の承認による自己金融の可能性を検討せられたが、結論として、配当利潤部分が自己金融を本来構成する筈のものではないことを指摘しておられる。然しながら、途上国の場合、暫時この社内積立部分が、超過利潤の先取りとして拡大再生産に貢献することはあり得るであろう。途上国ではいわゆる多国箱企業を歓迎し、株式制度を維持し、過半数株支配を民族資本の側で掌握する方針を今後も放棄しないであろう。また、株式による会社と株主とに二重課税を適用しないようにとの要請 (エクワドールのビリャゴメス博士) を引続き先進資本主義国に対して行なって行くであろう。一方、不払労働部分を補うものとして、西独方式に見られるような、労働の企業参加もまたこれを期待して歓迎するであろう。然しながら、イスパニアの場合、上述西独における労働の企業参加に見られる所有参加は、実質的には利潤参加の要求であり、この点が西独とイスパニアとの違いなのである。産業社員の制度は、超上部構造の契約からの保障としては、政府による憲法近代化の努力に先駆けて、既に19世紀の合名会社法で労働の利潤参加における一の問題解決の方法を提示したものであらうと思われる。この意味から、合名会社社理

について先に紹介した Antonio Goxéns Duch 氏の解決方法の妥当性が支持せられることになる。

裁判所が擁護する国際法からの超上部構造契約的支持として、憲法を守る政府の国民経済発展計画自体はその大きな、側面からの貢献を受取ることには違いない。法の前の平等の原則はイベロ系諸国では永久に守り抜かれて行く不滅の国際法上の鉄則であることを考えるならば、イスパニア国合名会社の産業社員もまた、会社法におけるその基本的性格を今後も引続き永久の妥当性として保持し、諸国の制度モデル的亀鑑の地位を存続できるに違いない。

なお、イスパニアの Turismo 論では、企業に対する規制の自由放任主義、介入主義及び折衷主義の立場の得失が論ぜられていることを付言しておく。イスパニアでは経営社会化についての企業体制は上述のように早くから整備されてきたが、国有化はできるだけ抑制せられて来た歴史的経緯が存在する。更に最近イスパニアでは Bolsa を中心として金融統計に経済統計を集中的にまとめることを目指して、連結連関会計を構成するための企業一般会計計画を普及させることに成功した。その主要目標がいわゆる多国箱企業の経済統計的把握を志したものであることには疑念の余地がないと考えられているが、序文における解説が、日本の個別資本説で取上げている個別資本の形態転化における循環公式を用いてそっくりそのまま承認せられる内容のものになっていることは注目し値する。以上の報告でイスパニアの合名会社法における産業社員の制度が、株式会社に到るまでの企業経理の基礎として企業体制全体の中で十分に位置付けを得て、現代の国際経営管理論に計算の基準を提示する基本モデルを構成できていることの特筆すべき意義を確認してよからうと思われる。

II フレデリック・ウインスラウ・テラー『科学的経営管理の諸原理』序文（西訳からの和訳）

——ブエノス・アイレス「エル・アテネオ」社第6版，1979年，7～9頁——

ルーズベルト大統領は、白亜館（ホワイト・ハウス）における知事会議へのそのメッセージで予言的な見方の所見を述べている。「わが国の資源の維持とは国民的成果についての最も普遍総合的な問題に対する事前の準備的歩み（過程）であると云うことに尽きる。」と、挙国一致してわが国の物的資源を維持することの重要性を確かに（直接的に）彼は認識した。そして、このようにして一大運動が始まったのであるが、その実際の効果は甚大と思われる。然しながら、これまでのところ、上記のこの「わが国の国民生産を増大するという最も普遍総合的な問題」の重要性をわれわれはただ莫然と認めて来たに過ぎない。

わが国の森林の荒廃、わが国の水資源の浪費、洪水津波で氾濫して海水によりさらわれたわが国の国土は測り知れない（見る事が不可能である）。わが国の石炭や鉄の埋蔵鉱床の枯渇は近い将来に見えている。然しながら、わが国における人間努力の大きな消耗浪費は、管轄のお門違い、悪性管理若しくは無能力によって日々生じているが、ルーズベルトが「国民的成果」の喪失として考えている上記のものは更に目に見えず、感知し難くて莫然たる評価がなされているに過ぎない。物的な浪費はわれわれは容易に見て確かめることができる。然し、人間のヘマな、非能率的

若しくは悪指揮の動きは、それら上記の動きの後に何も見えるものもなく若しくは感知できるものを残さない。その評価には記憶と想像の努力を要するのである。従って、上記のこの理由から、わが国における労働力の日々の損失が、わが国の物的な浪費による損失よりも更に大であるにも拘わらず、上記後者（物的浪費）がわれわれを震撼せしめて来ていながら、一方前者（人力的浪費）はわれわれにとって殆んど印象づけられて来ていないのである。

今日までのところ、「国民的最大効果」の恩恵に公的不安動揺は起っていない。上記のその成果を獲得する方法を考慮するための会議は召集されていないのである。然しながら、最大効果の必要性が広汎に感ぜしめられているという明きらかな兆候が存在している。

いっそう良くまたいっそう適格性を持った人物の探求が、上はわが国大会社の社長から、最劣等の召使いに到るまで、今日ほど熾烈さを極めたことはなかった。また供給を越えての適格者の需要は未曾有のことである。

然し、われわれが探し求めているものは、その仕事（職務）に精通し、即刻使用され得る人なのである。他の人々によって組織編成されている人間である。われわれの為すべき義務は、このようにしてわれわれの好機会に従って、恵まれたならば、上記のこの適格な候補者を、他人によって編成されている人間を探し求めるかわりに、指導し組織形成することに制度体制的に協力することにあるということをわれわれが理解する時にのみ、われわれは国民的最大効果へと導く道程に身を置いているのである。

以前は、支配的な理念が次の言葉で表現されていた。「工場長は生まれるのであり、形成組織されるのではない。」と。そして、学説理論は適当な人が得られた（獲得せられた）ときは少しの危険も伴うことなく彼に手段の選択を委ねることができるとして認めていた。将来はわれわれの工場長は、正しく指導されなければならないこと。及び、どんなに有能であっても、個人的管理の古いシステムを用いては、多数の協同者であってしかも組織編成がよろしきを得ており、彼らの努力を調整することの出来る人たちと競争する期待を持てる人はいないということが理解されなければならないであろう。

以前には、人間がそのすべてであった。将来はシステムが主にならなければならない。然しながら、このことは、偉大な人物が不必要であることを意味しない。事柄は逆であって、良きシステム全体の第一級の意図（意思）は、第一級の人間が構成しなければならない。また、最良の人間は、システムティックな経営管理の下には、最も安全確実、かつ迅速に、頂上をきわめることになるであろう。

この論文には次のことが書かれている。すなわち：

第一：単純な一連の範例を媒介にして、われわれの日常の殆どいっさいの諸行為の非能率が原因となって国家全体が蒙っている一大損失を明示するためのもの。

第二：上記のこの非能率のための救済は科学的システムティックな経営管理に存する（宿る）ことを読者に説得しようと努めるためのもの。

第三：最良の経営管理は真に科学的なものであり、法則、規尺及び明白に定義せられた諸原理の上に宿るということを実証するためのもの。のみならず、また、科学的経営管理の基本的諸原則は、最も単純なわれわれの個人的諸行為から、われわれの巨大集団組織の労働に到るまでの、あらゆる種類の人間活動に適用され得るものであるが、それには最大限の丹精込めた熱意溢れる協力が要求されることを示すためのもの。そして、要するに、一連の諸範例を媒介にして、これら上記の諸原則が常に必ず正確に適用せられてこそ真に驚異的諸結果が齎らされることを読者に納得してもらうためのもの。

上記の本論文はオリジナルには「米国機械技師協会」に提出されることを目的に整備せられたものであった。選び抜かれた諸範例は、われわれが、産業及び工業の諸機関の技師及び経営管理者に対すると共に、同様に上記それら諸機関に働らくすべての人々に対しても関心を抱かせる筈であることを確信しているというそうした性格のものなのである。同様にして、その他の読者におかれても、上記の同じそれら諸原理が、いっさいの人間諸活動に同等の利用の可能性を以って適用され得るものであることを御理解戴き度いと願っている。：つまり、われわれの家庭生活の、及びわれわれの農場の運営管理において、大規模及び小規模の商業の運営管理において、教会及び慈善事業の運営管理において、大学及び政府各部局において。

F.W.T.

(フレデリック・

ウインスラウ・

テラー)

III 最低賃金（訳）

——ルイス・クリアード・アバー、『イスパニア国社会・経済発展における賃金及び雇用』協同討議、ヌエボ・オリソンテ、グラフィカス・オスカ株式会社、マドリッド、1963年、48～50頁——

今度は最低賃金の分析に関する見透しの研究に移る。最低賃金の設定は、これまで取り扱われなかったにしても大した問題にはならない。その効果は、産業労働組合の行為によって強化せられた最高賃金の設定の効果と似通っている。若し最低賃金の実効的でないならば、つまり、若し賃金が現実には安価な低賃金の形で支払われてはいないならば、直接的効果はこのタイプの労働の需要における衰退となるだろう。然し、この衰退は単に一時的なものたり得るのである。若し、労働市場が最低賃金の需要独占（独占的買手市場）であるなら、需要独占の搾取に簡単に終止符が打てる。その他の場合には、高賃金政策を進捗前進させられる。いずれにせよ、増加賃金は、いっそうの高生産性（労働者の、栄養補強、衛生等により良い条件）に導き、改良設備の扶植導入に導き、最終的には、多分、元に等しい雇用の水準に導くのである。上記のこの場合が其所で未だ起こらなくても、最低賃金は適正化せられる。つまり、苛酷なまた搾取的な賃金の存在は、

社会的、及び、就中、人間的な視点からは容認され得ないのである。従って、政府（Estado）は最高賃金を定めるように要求される。上記のこのことは、労働者で雇用の無い者がいる場合に起こり得る。；然し、改革を敢てしなければ、低賃金は一地方の、若しくは一県の、若しくは更に特殊的には、一産業企業の枠内でながく続き得るに違いない。上記のこの状態（形勢・情勢）だけがもっぱら（単独的に）創成せられるときで、かつ、新しい道が開かれる際にはプロレタリアグループの社会（的）生活にとって重要な変化に到達され得た。この後者（プロレタリアたち）が、より高い賃金を支払う新らしい産業企業に向って移動したのである。上記のこのことは、若し、他の産業企業が、前の産業企業が支払うそれ（賃金）よりも更に高い賃金で付加的労働力を吸収し得るならば、もちろん、機能（作用）するであろう。上記のこのことが可能であるとするならば、次のことに依存して行くのである。すなわち：

第1. 失業している者の数により。

第2. 資格・能力・適格性の度合、及び地理的分布の度合により。（イスパニアにおける雇用の結果的帰着の必然性についての研究の重要性が、どんなにわれわれにとって絶えず有用なものになって行くかを観察せられよ。）

第3. 加うるに、当該産業企業全体における、及びサービス部門における繁栄の度合により。不況時には、最低賃金を定める政策は、経済的拡張の時期におけるよりも更にいっそう慎重（憶病）でなければならない。

最低賃金は、若しくは無資格労働についてであって、しかもこの形態の労働がイスパニアでは支配的なのであるが、言及されて問題になるならば、大多数の労働者、また、とりわけ農業労働者に影響作用して行く。つまり、この後者の農業労働者たちの大部分は、専門的工場労働者の性格を有しないからである。従ってそれだけ、最低賃金の扶植導入（樹立）は農業地方において、産業工業企業におけるよりも、かつ、この後者で第3部門（サービス部門）が支配している場合よりも、更に大きな反響を持つことになる。だから、いっさいが生産の構造に依存して行くのである。この結論は相対賃金の変化の帰結を限定する時点に大きな重要性を持って行く。上記のこの政策の終局目標は、勤労者の或特定部門の生活水準を改善することにある。条件は、グループの稼得能力を増大しようとするものであり、すなわち、物価の増大は、賃金の増加を中立化させないような条件なのである。一部門における賃金の増加が、需要に向けて、費用と付加（需要）の増加を同時に含めて賦課するときは、相対賃金に関する政策は、個別特定の上記のその商品（部門）の勤労者が消費を少くするだけ、及び全体需要の上に影響が少なければそれだけいっそう効率的になるであろう。（このことの全容は既に、前に分析されているところである。）

上記のこの討論は、他の賃金が調整されないという想定（仮定）の中でのとなおかつ特定条件で実現され得るものであることを我々に考えさせるに到る。然し、若し、相対賃金についての政策が、大多数の勤労者に影響作用するならば、賃金水準の上に反響が避けられないであろうし、また、従って、物価の上にも反映して、この後者（物価）の上の反動作用により、採択せられた手

段は中立化されるのである。

賃金水準に関する政策は、同等の割合で、上記のそれらいっさいを上昇へと歩ましめるものとして定義付けられ得るのである。社会政策にとって真に重要な問題は、賃金の一般総合的な上昇の実際効果を調査するというそれ（問題）なのである。つまり、そのような手段で達成しようとする目的は、社会的生産における勤労者の参加を高めることだからである。すなわち、相対賃金を改善向上させることなのである。大した影響を受けることもなく、我々は、上記のこの相対賃金の改善向上が、一方では企業家（経営者）と資本家（投資家）との間に、及び他方ではサラリーマン労働者の間に、所得の機能的配分となるだけの話だという結論にわれわれは到達するのである。上記のこれが、両者（経営者と資本家、及び労働者）双方のグループの意見なのであり、また、これは社会的な当局の意見でもあるのである。この最後に述べたことの故に、勤労者は、常に引上げ向上の恩典に浴している。然しながら、どの点まで賃金の一般総合的な引上げが、勤労者自身にとって害悪を及ぼし得るかを研究することが極めて重要であるに違いない。

〔訳者コメント：時空における線と面（次元）〕

一時的なインフレ政策によって、発展にプラスがあったとしても、総体的な結果が、努力の効果を否定するものになってはならないことを充分に考えておく必要があるだろう。このことは途上国が敢てインフレ政策をとることにより、将来への犠牲になろうとする際に重大な警告となる。未来への現在の犠牲は——それは一般の発展における特殊部門の犠牲を要求することでもある。

なお、フェンテス・キンターナ博士が賃金は最高限を抑えた画一的斉引上げ、社会保障はその時々の可能性における最高水準のものでなければならぬと云っている。博士の賃金政策は国民経済全体で考えられ、社会保障は利潤部分若しくは生産性の枠内で考慮されている。社会保障は物価の水準を基調にした財政支出であるが、財政収入が賃金所得と利潤への課税という国民所得からの調達であることによった考慮である。

IV フォードランドのブラジル進出顛末記

——ヴィアンナ・モーグ『パンデイランテスとパイオニア』（二文化の対比）抄訳（原典と西訳を参照）——

1928年の頃ヘンリー・フォードは脳裏にある固定観念を浮かべ始めていた。彼の工業企業のためにゴムの調達をするという悩み多い厄介な問題を解決するために奇術師まがいの方式を発見することが必要だったのである。セイロンの英人とジャバのオランダ人たちが彼に要求する価格を受容れることにはほとんど閉口してうんざりの態であった。そうした彼は、英人の手中に収まっているゴムの支配が悪辣なものであり、また、その支配を醇化し、それを受戻して救済する唯一の方法は、英国資本主義の保守反動者の擁護の手から、米国資本主義の若い健康な進歩的擁護へとその支配を移行させることだという結論に達していた。その方法はいったいどうするのか。アマゾンでゴムを栽培すればよい。英国配下のヘンリー・ウィックマンがアマゾンのゴムの苗木を

密かに英国へと送っていなかったか。そして、——ロンドンの植物園——キュー・ガーデンの温床ストーブで風土に馴染ませた後、それらの若木を世界最大のゴムのプランテーションに移して、東洋で完全に根着かせてはいなかったか。

ところで、若しもブラジル原産の若木がその原産地国から移植されて、上記の方法で、パラ州のベレンからゴムの尨大な取引の中心地セイロンと方向転換して育てているとしたら、初源地とシメトリカルな対蹠地に植えられてそれら同じ若木が機能して役立たないほうが不思議に違いない。すべては適合地においてゴムの画一的なプランテーションを組織するか否かにかかっている。

従って進路はブラジル向け、アマゾン向けである。理想的な場所と云えば、米国のエバングレードであったに違いない。然し、ヘンリー・フォードは、友人のトマス・エディソンが失敗した事情を知っていたので、米国でゴムを植えようと志すに際して、考え方を固執するには実際面の憂慮があった。アマゾン地区でなければならなかったものであり、パラ州のアマゾン地区で、かつ、ヘンリー・ウィックマンが1892年に、まさにその土地でゴムの若木付きでの地主卿（ロード）の資格を獲得したタバジョス河畔にでなければならなかった。まことに残念なことであったが、上記のそれらの樹木は運悪く不幸にも米国企業の羨望の的でありながら、——恐らくは神々のように白人系の血を引き、確かに植物学的な分野のアーリア族に当たるわけで——自然の神の手違いで熱帯に育っただけのことなのであろう。

結局、米国では駄目なものなら、せめて米州圏のアメリカであってもらいたかったわけである。腹は決まった。ヘンリー・フォードはアマゾンにゴムを植えることにした。ゴムの英国独占の時代はもはや清算されて終った。神罰が、ヘンリー・フォード大天使の復讐の剣を通して、強奪、耶嚙、密輸に発する独占の上に下だって行っただけである。

そんなわけで、針路をブラジルに向けて、アマゾンへと目指して行っただけである。

ヘンリー・フォードの考えが定まると、たちまちこれが具体的な形をとり、彼の脳髓から出て行動に移され、新聞の称賛と拍手喝采の的になり、ディアボーンの造物主の新たなプロジェクトの報道が早速世界にひろまった。英国は震え上がった。ブラジルは歓喜に満ち溢れた。そしてすぐさまパラ州知事は、聯邦政府の承認を得て、ブラジルで一般に米州圏の人々（アメリカ人）を迎える際の習慣に従って双手を拡げてフォードの使者を受容れた。

フォード氏がパラ州にゴムを植えたいとお望みですか？ 結構です。素晴らしいお考えです。ところでフォード氏はそのプランテーションを何処に持とうとなさるお積りですか。タバジョス河畔にですか？ 承知しました。ところで企業の敷地をどのくらい御希望ですか。247万エーカーですか。よろしくごさいます。然し、平方軒になおすと、大略どのくらいになりますか。また、ブラジル人が考えて直ぐ分かるようにその面積を比較するには大凡そ何がそれにあたりましょうか。丁度コネティカット州の6分の5になります。……そして直ちに許可（コンセッショ）の政令が成文化されて取引が進捗し始めた。

誰も彼もが幸せですか。皆んなが幸福におさまりましたか。そうは行かないことは明白だ。ジャバとセイロンの英国人やロンドンの証券取引所は眉をひそめて渋い顔をした。もちろん、アマゾン流域のコロノたち、国ほどの広さの土地の地主たちも彼らと共に顔をしかめた。また、それは少々の程度のことではなかった。ヘンリー・フォードがタパジョス河畔で労働者に日給2弗から5弗の支払をする——つまり当時の換算で40乃至100クルゼーロにあたり、彼らは5クルゼーロ以上支払わないのが普通であったが——という声で、彼らはゴムの古戦場のボランティアたちが逃げ出さないように河、湖、パラナース（真中に島があって河川が二分されている支流）及びイガラッペース（天然の狭い河溝で二つの島の間、又は島と陸地との間にある河峡）の監視監理を強化しなければならないと悟った。そうでなければもう一疋のゴムも増収は得られなかったに違いない。

一方、ミシガン湖のディアボーンでは活動は熱に浮かされた激しさになった。急拠、アマゾンの征服を遂行に行く船隊が艤装して整えられた。これらの船隊は一都市を解体して運んだことであろうが、ちょうどフォード自動車会社の組立ラインから出て来る自動車を扱うように完全に組立工程を通したまごとの仕上げられかたであった。つまり、家屋、病院、喫茶店、セメント、テニスコートの砂、保健衛生施設、ブルドーザー、機械式製材所で、解体した一都市そっくり全部と組立の出来上がり表といったものであった。1624年にアムステルダムから出発した船隊がペルナンブコやブラジル北東部を征服して以後、わが国（ブラジル）向けに斯くも完全に装備せられた近代文明的遠征隊が出発したことは未曾有のことであった。

ヘンリー・フォードの船隊は今や大湖の水を切って進んでいる。サン・ロレンソ海峡に入ってきた。その船首（へさき）は波を蹴立てて大西洋（マル・オセアノ）の水を二分した（大西洋に出たの意）。カライーバス海の竜巻を迂廻した。もはやアマゾン河の河口の沼沢の土手を見ている。右折してリオ・マル（マル河）河口の河流に勇ましく向かっている。もうパラ州のベレロンとサンタレーンを後にして、今や左折し、緑地帯の壁を分けて、アマゾン河の泥水を打ちやってタパジョース河の紺碧（エメラルド）の水に姿を埋めている。

フォード・ランドに着くや否や接岸した。一方、世界の全新聞は、互いに相呼応して歴史的な偉業に感動した。フォード氏のアマゾンへの挑戦が始まったのである。

北米では、諸新聞は鬭争の細部に互って気を配っている。

ジャングルは抵抗したがへきえきして尻込みし退却した。また、ジャングルと共にブラジル貌、猿、鸚武、蛇も一緒にである。一方、ブルドーザーは空濶地を作るために必要な樹木を倒して行き、新しい都市が建設せられた。しゅろ（カポック）の木、蔓草、ミモザ（ねむり草）、杉、桑、ゴム、処女ジャングルのすべての大木には、バテスがアマゾンで分類し、また最大の勝利を博したダーウィンの学説諸理論に基調の役割を果たした各種植物といっしょに退却し、殆んど根元から切倒された。つまり、本当は根元がおまけにたいして深くなく、外見の頑丈さと堂々としたアスペクト（側面性格である様相）から期待される程度には思ったほどのものではなかったのである。

フォードランドにはもう家々が姿を見せ始めた。また病院、保健所、テニスコート、監理者住宅、労働者住宅、喫茶店、薬局などが現われた。それはニュー・イングランド若くは中欧そのままの姿であった。アマゾンのジャングルのどまん中にヤンキーが北米の都市を出現せしめたのである。

そしてすべては前以って考えられた諸計画（プラン）のとおりうまく行った。3,000人の入植者たちがフォードランドで日給50から150クルゼーロの間を上下する賃金で働いた。百万本のゴムの若木が処女密林を不断に征服して大地に植えられた。上記のこのジャングルはまだ生き残ってはいたが、既に瀕死の状態であった。すべてはバラ色であった。そして二年足らずの経過で美しい樹木の分隊、中隊、大隊、聯隊を形作ってゴム林が成長し始めた時には、もはや戦闘の終末についての疑念を誰も心に泊める者はなかった。

ロンドンの証券取引所ではゴムの価格は目まぐるしい速さで下落し始めた。ポンドは1ドル半から1ドルへ、更に80セントへ、その後70へ、25セントへと下がった。ジャバのゴム植林者は完全に荒らされた。

1936年に、エドワード・トンリンソンは、Colliers（コリアーズ）の12月12日号に熱情を込めて宣言した。「地方のどまん中で、奇妙不可思議な、文字どおりの科学的な考古学者たちが、冒険の綾錦の裾を綻ばせて、放浪遊牧の民フェニキア民族の、若しくは、ジャングルに迷った往昔のその他の民族の末裔である子孫の人種の、神話の城壁都市を探し求めて赴いたその地方に、ヘンリー・フォードは新しい文明の基礎を投じた。」と。

事実、フォード・ランドはひととき光彩を放っていた。十分に距離はとって距たっていたが（正規の距離を保って）ディアボーンが設立せられたのとまったく同じ諸目的のための完全な産業工業都市であった。2,000人以上のための6か月間用の食糧を蓄えるに充分な冷凍室の設備をもっていた。物的にはこれ以上の効率と快適はないと賛（ホ）められる病院が配慮されていた。アマゾンの入植者たち（カボークロス）はその当時まで一軒建ての（一棟の）掘立小屋しか知らなかったが、今や水道付きで、3つも部屋のある家屋敷に住んだ。

皆んな幸福だったであろうか。少数監理職員の家族たちにはこれ以上の満足はあり得なかった。場合によってはデトロイトにおけるよりも更にタバジョース河畔でいっそう満足していた。デトロイトではフォード氏の家庭的恩情主義とその理想的寛大心にと馴染まない労働者の軋轢が、騒乱の発酵（燻すぶり）が絶えなかったからである。アマゾンのカボークロス（入植者）たちは何とおとなしく性格の良い人たちであることか。何と単純で、丁重で、殷ぎんで愛すべき人たちであることか。また、ジャングルの神秘をテーマにして何と世にも珍らしい話を物語る事が出来たであろうか。（王女に見染められた）大蛇、海豚、亀（ジャボティー）、幸福の小鳥ウイラプルー。ウイラプルーの話は何と素晴らしい歓喜の種であろうか。ウイラプルーが歌うときは全密林がおし黙って耳をそば立てる。木々は身を擦じてつぶやきをとめる。豹は吠えるのをやめる。鸚鵡は唄をやめておし黙る。つまりそれはウイラプルーが密林のなかでいちばん醜く、しかも弱

々しい鳥だからである。

突如、牧歌の陶醉の中に最初の驚きが起こる。上述のようにいんぎんでおとなしいカボークロス（入植者たち）が獐猛な鬼に変貌する。喫茶店にあるすべてのものを破壊し、足元にあるものを手当たり次第に粉碎する。それは文字どおりの暴動になった。フォードモーターカンパニーの職員とその家族たちは死に怯びえて遁走し、港に繋いであった荷物運搬船に隠れた。カボークロス（入植従業者）たちは、バステューユの牢獄を占領したフランス人たちのように昆棒で身を鎧ろい、少人数の管理職員の保塁に向かって進んで来て、船に乗っている人々の耳には何やら分けの解からぬことをがなっている。いったい何をそんなに猛けり狂って大声でどなっているのだろうか。「フォードをやっつけろ」であろうか。「フォード自動車会社よ、くたばれ」なのだろうか。そんなことではない。ほかならぬ水兵ポパイの個人人格的な問題である。カボークロス（入植者）たちが叫んでいるのは「ほうれん草くたばれ！」「俺たちはほうれん草にはもうあき倦きた！」であった。

米国人所有のあらゆる物件の破壊は一晚中続いてすさまじさは少しくおさまった。翌日、パラ州のベレーンから軍の派兵が到着してそれまでの経過事件が已んで鎮静した。カボークロス（入植者）たちはほうれん草の料理で結構豊富なビタミン入りの食事にあきてしまっていた。もうこれ以上ほうれん草のたち込める臭いは許せなかった。コーン・フレークスについては云わない方が良かったのである。彼らカボークロスが欲しいものは牛肉の塩漬（タサージョ）であり、時々いんげん豆の豆ゴハンが欲しかったのである。人間には時には手料理の鯉を入れて豆ゴハンを食べ、糖蜜入りの甘い酒をたしなむ権利があろうではないか。それはもう結構なのである。充分なのである。

そして、たった一晚でフォード・モーター会社の管理職員たちは、大学での数年間の社会学以上のものを学んだ。彼らは、上記のおとなしいカボークロス（入植者）たちがフォード氏の崇高な知的理解を完全に逃避する諸動機を通じて獐猛に変貌し得ることを学んだ。彼らは居住している金網で囲い保護せられた、扉や窓のある家屋と、彼ら入植者たちに米国人たちが賦課する慣習的な清教徒の体制に耐えられず、物的に忌み嫌うことを学んだ。米国式に床の上に直接に建造せられていて、カボークロス（入植者たち）がその当時まで住み慣れた掘立小屋のように水上家屋式に丸太棒の上ではないので、上記の住居は熔鉱炉のようであった。そのことは、寒さの問題をセントラルヒーティングが解決するのと同じで夏場にはその大部分で米国式家屋は、暑気の問題を解決する冷房装置がないと結果する暑熱のやり切れなさをちょっとばかり考えるならば理解の困難なことではない。

一方ディアボーンでは、ヘンリー・フォードはほうれん草の暴動について慎重に考え、人類が彼フォードに提供した理解の難かしさの前に落胆嘆息していた。フォードの工場の労働者自体が彼フォードに提起した問題が彼にまだ不足であったかの如くに、今度は上記のアマゾンのカボークロス（入植者）たちが、彼らを甚だ恐るべき悲惨と後進性から救い出し、ビタミン食とディア

ボーンにおける労働での同一基準の能率を用いて米国式生活の至上の冒険へと彼らの水準を高めながら人間性の肝心なやさしさ（親切心）に関する彼の疑いをいっそう大きなものにさせるに到ったのである。フォードは一連の組立方式と神の摂理の計画目的を充分理解した人であった。彼はアマゾンのカボークロス（入植者）たちの心理は絶対的なところまではうがち貫らぬいていなかった。

然しながら、当時の世界には、カボークロス（入植者）たちは別として、その管理運営を以ってフォードの思想を暗胆たるものにし、悩み苦しめるもっと他の種類の人間たちがいた。英国人、ユダヤ人、消極的（事なかれの）否定主義者たちであった。アマゾン河畔とパラナ河岸の労働者（コロノ）たちは賃上げで団結することはなかった。——当時のノスタルジア（郷愁）が嵩じてこれがその愛人のために劇場を建てさせ、2百ミル・レイス（クルゼーロ）や500ミル・レイス札で葉巻煙草を巻いて燃やし、その子息をヨーロッパへ留学に送ったりしたが——また合理的な方法でゴムの木を栽植するという理想は断念されなかった。そうした人たち（コロノたち）はフォードには問題ではなかった。然し、ユダヤ人、英国人及び否定的消極主義者（事無かれ主義者）たちは彼フォードに夢を捨てさせて眠りから覚めさせた。

しかも、云うならば、フォードランドの未来に言及してユダヤ人と英国人についての予言の谿（コダマ）を響びかせた真のカサンドラ（ギリシアの伝説で Troya 王 Priano の娘。王の敗滅を予言した。）である否定的消極主義者（事無かれ主義者）たちは、米国自体に存在したのであった。ヘンリー・フォードの気高い性格自体を否定したわけではない。米国人パイオニア式、ヤンキー式、彼の人となりに彼らの予言者たちは彼の新しい型の資本主義を以てしても、その産業主義は、彼フォードの誕生の時代には、共産主義から見れば若干古臭い過去のものになっていたことを認めていたのである。つまり、すべてはロシアが遠い未来に向けて労働者たちに約束していたことであつた。——高賃金、低物価、市民的平等、経済的博愛主義がそれである。——そして、現在の世代を、既に征服した自由を犠牲にして、ヘンリー・フォードは資本主義に注入した若人の熱血のお陰で、自由を犠牲にすることなく（自由の犠牲を伴うことなく）現実の世代に上記のそうしたことをまさに現に与えていたのであつた。崇拜と喝采を浴びるかどうかの、才能上の全ったく個人的人格の上での帰属だけが、人類の普遍的向上へのフォードの貢献に就いて疑念をとどめ若しくは拘束を加え得たのである。

然しながら、生じたところは、ヘンリー・フォードの崇拜（賛嘆）者たち自体は、氏（フォード）がまさに神々の遣り賜うたというような者でなく、幸運にも、その自動車工場のシステムに全く相応わしくない機械技師であつたに過ぎないとのみもっぱら考えただけのことであつた。その工場システムでは末端にまで行届いて、そこでは彼が理解しなかったことについての誰も彼を呼んだ者のないところ（お呼びでなかったところ）にみずから没入して励み、また、法皇の座についての支配をしたのである。彼らには、良いミカンが実のするという事実だけによって、ミカンの木がマルメロやバンジロウをもまた実のらせなければならないなどは、またヘンリー・

フォードが自動車と同時に人間性（人類）を救うような魔法の方式を製造すべきであるなどとは思われなかったのである。

いずれにせよ、フォードの失敗はあったが、1917年に世界を戦争から救うために過ぎし日の時代の遠征隊が編成せられた時には、頑迷な迷信を信ずるかつき屋の小鳥共たちみんなの脳裏には、フォードランドの最初の頃の成功の情報が彼らを充分説得させるに足るためのものであったとして余りにもまざまざと生きていた。

その間にも一方、ヘンリー・フォードはずっと情報を受けかつ読んだ。そして上記のこれらの情報は、新聞の初めの頃の頁に現われた話とは若干くい違った報告になっていた。カボークロス（入植者）たちの暴動に加えてフォード・ランドには若干の技術上の困難が現われていた。例えば、アマゾンの種類の違った密林のあらゆる樹木を截断するために仕込まれた（仕向けられた）機械制製材所は好結果をもたらしていなかった。まさにアカプー（acapu、荳科で蝶形の花冠をつける豆の木）のような樹木では、その材木はアメリカ（北米合衆国）市場向けに関心を以て迎えられるが、すべての鋸をゆがめてだいなしにし、モーターを焼いた。そしてどんなにこれらモーターによる鋸の馬力と速度（スピード）を精いっぱい倍増してみても、木材の抵抗を緩和克服する手段にはならなかった。このことは、熱帯ジャングルの異質性に対する適当な型の鋸が未だ発明開発中であつたと云うに等しいものであつた。上記のことが動機となつて、アラスカのちょっとした松林が商業的採算上、ブラジルの処女密林全体よりも優つて値打ちがあつた。然し、悪いことに未だそのことは出来上がつて獲得済みのものになっていなかった。百万のゴム樹が（太陽の直射日光）過度な日照りと、雨量の欠亡及び熱気によって弱められて行つたことは最悪の事態であつたに相違ない。暫らくの間繁茂して育つた後は、灌木の蔭に植えてそれを保護しないコーヒー樹の場合にアマゾン河畔で起きたこととまさに等しく、地域の灼けつく日照りに曝らされて息絶えだえにしなびてしまつている。フォードのゴム林部隊は日照りに枯死して行つた。甚だむごたらしい植物界の悲劇であつた。ダーウィンによれば、棲息は闘いであり、闘いには勝利は常に最強の者のためにある。アマゾン地帯では密林の無秩序がゴム林の栽植の綱紀（軍紀）に打勝つたのである。

その後物語の結末は急速に落着した。1938年にフォードはブラジル政府に新規の土地のコンセッション（特許）を申請した。——Belterra（ベルテッハ）の耕地である。——そして前のコンセッションの土地はきわめて安価に手放した。ブラジル政府は直ちに承諾した。ブラジル政府はフォード氏に何の渋り方もしなかつた。それはあたかも彼フォード氏がもはや末期（マツゴ）の水を取り、瀕死の状態にあつたかのような思いやり方であつた。その後は音沙汰もなくなつた。フォードランドは現実の第一級の地歩と見出し（トップ看板）の第1頁を捨て退き、人造ゴムの発明者と生産者が米国でのゴムの問題をその後解決することになった。

物語を簡略化するために、1946年1月に、フォードがアマゾンから引揚げるといふ淋しいニュースが世界中に伝わつた。フォードがブラジルを引揚げるのである。それがおしまいの終止符で

あった。物語の全面的な大団円は上記のこの題辭（碑銘）に総合されておさまっている。事実、フォードランドの物語は、雑誌や新聞の標題の電報文形式のスタイルに要約して切り詰め纏められることができた。そしてその話を再製するには、上記のこれら標題が、1928年から1946年までのニュー・ヨークの公立図書館による当該図書にゴムのタイトルでカタログ記入されていたように整理されさえすれば充分である。熱狂的経験の総括を構成することになる。

その第一段階では大へんな希望の幸福感がみなぎっている。「ゴムについての英国の独占に対する米国の応報。ゴムに関する英国支配の終末。ゴムの市場を開放（自由化）する件。」

第二段階では希望は確実なものになっている。「米国向け（のため）のゴム：米国に工場，ブラジルにプランテーション。アマゾン流域での密林制覇。密林の黄金：フォードランド。其処にはブラジルのゴムが新たに生氣を取戻した。タバジョースでのフォード。フォードランドでのゴムのプランテーション。アマゾンの奇蹟の都市。」

最後に失敗のはじめての明示と寝耳に水の引揚：「ゴムについての悪い知らせ。ゴムの木の葉っぱは太陽の光に曝らされて赤茶けた。人造ゴム。フォードはブラジルから引揚げた。ブラジルからのフォードの引揚。」

それから以後は何の音沙汰もなくなった。